

当病棟における顎間固定中の患者の口腔ケアに関するスタッフの意識 オリエンテーション用紙作成による介入

原 彩 齋 藤 舞 清 水 千 晶
野 口 那奈子 松 井 祥 子 吉 岡 瑞 子

Key Word: 口腔ケアオリエンテーション, 顎間固定, 口腔ケア

はじめに

現在、当病棟では顎発育異常症と下顎骨骨折に対し年間約30～40件の顎間固定術を行っている。患者の多くは10代後半から20代であり、手術前日に入院することが多い。入院当日にはウォーターピックを用いた手術後の口腔ケアについて説明、指導を行う。指導を行う際には、オリエンテーション用紙等は使用しておらず、口頭で説明するのみで方法は看護師によって異なり、統一されていない。また、手術後はウォーターピックを使用しているか、顎間固定がしっかりされているかの確認は行っているが、口腔ケアの方法は患者に任せていることが多い。そのため、効果的な口腔ケアが行えているのかを十分に把握できていない現状があった。そこで、どのように口腔ケアの指導を行っているかのアンケート調査を行い、現状を明らかにする必要があると考えた。また、術後の口腔ケアについてオリエンテーション用紙を作成し、病棟でスタッフへの勉強会を行うことで、統一した口腔ケアの指導、観察を行うことを目的とした。

I 研究 方 法

1.研究期間

2015年10月～2016年1月

2.対 象

A病棟看護師(師長を除く)27名にアンケート調査を行った。

3.調査方法

事前アンケートでは、口腔外科チームの経験の有無、患者に術後の口腔ケアの指導をしたことがあるかどうかを①ある、②ないで回答してもらった。また、何を使ってどんな説明を行ったか、①ウォーターピック、②口頭、③その他(自由記載)とした。使い方の説明をしたことがない人には、説明をする際に不安な点が①ある、②ない、とし

て、具体的な不安を自由記載とした。また、説明をするにあたって必要なものはあるか、①オリエンテーション用紙、②実寸大模型、③口頭のみ、④その他(自由記載)とした。手術後、患者の口腔ケアの確認はどのように行っているかを①ウォーターピックの使用状況の観察、②患者の手技、③使用前後の口腔内の観察、とした。

上記アンケートの実施後の結果を考慮し、さらに先行研究を参考にオリエンテーション用紙の作成を行った。木村¹⁾、日野原²⁾らによると、顎間固定中は食物残渣が停滞し不潔になりやすく、口腔清掃の必要性を説明し、含嗽、口腔洗浄機の応用、歯ブラシの適応・使用法などについての指導と介助を行うことで、口腔清潔保持が出来ると述べている。また、木村¹⁾らは細菌増殖による創からの二次感染が考えられ、二次感染を予防する為に、術後の口腔ケアは重要であると述べている。日野原²⁾らは、手術後に適切な口腔ケアを行うためには患者指導と看護師による口腔内の観察が重要であると述べている。堀内³⁾らによると、バイオフィームは歯面や粘膜面に強い付着能力を持ち、抗菌剤の浸透力は期待できないため、物理的な力で除去するのが現実的である。ブラッシングを基本にウォーターピックや歯間ブラシを併用すると効果的であると述べている。柿木は、ウォーターピックによる洗浄は歯間部や歯周ポケットの食物残渣や細菌を取り除く装置で、洗浄効果はあまり高くなく、これだけでは歯垢を完全に除去することはできないと報告している。堀内³⁾らは、ブラッシングとウォーターピックを使用する事で歯面や歯間に付着した食物残渣をはぎ取る効果があると述べている。ブラッシングはヘッドの小さい3～5歳用の歯ブラシを使用し、毛先が広がらない程度の圧で細かくブラッシングすると磨き残しが少ないと報告されている。木村¹⁾らは、顎間固定後、創部の疼痛、腫脹が軽減する2.3日頃まではウォーターピックの水圧は弱で行い、4日目以降は状況に合わせて水圧を強くしていく事で効果的な口腔ケアが可能となると述べている。

旭川赤十字病院 4階きた病棟

AWARENESS OF STAFF REGARDING ORAL HEALTH CARE OF PATIENTS WITH FIXED INTER-MAXILLARY

Aya HARA, Mai SAITO, Chiaki SIMIZU, Nakako NOGUTI, Sachiko MATUI, Mizuko YOSIOKA

The seventh-floor north ward, Asahikawa Red Cross Hospital

以上を参考に、口腔ケアの必要性、効果的な口腔ケア方法が患者にも理解できるよう配慮し、オリエンテーション用紙に説明文を記載した。顎間固定の模型を作成し、口腔ケアの様子を写真つきで説明することで、術後の口腔内の状態や食事、口腔ケアについてイメージがしやすいように努めた(図1)。子供用歯ブラシの使用が効果であることを文中で説明し、口腔外科外来の協力を得て、術前診察時に作成したオリエンテーション用紙を配布し、入院前にあらかじめ口腔ケア用品が用意しやすくなるよう介入を行った。

勉強会ではオリエンテーション用紙を用い、ブラッシングの指導方法を説明した。また、アンケート結果から口腔内の観察が不足している実態を周知し、改善を呼びかけた。

勉強会の実施後、再びアンケート調査を行った。オリエンテーション用紙を用いた説明を行い、ブラッシングを指導するようになった感想を自由記載で回答してもらった。また、オリエンテーション用紙は口腔ケアの説明に役立つと思うかを①思う、②少し思う、③あまり思わない、④思わない、とし、理由を自由記載とした。顎間固定中の患者の口腔内観察を意識するようになったか、①なった、②少しなった、③あまり変わらない、④特に変わらない、として、特に何を意識して観察するようになったかを自由記載とした。顎間固定をしている患者の口腔ケアに関する知識が深まったと思うか、①思う、②少し思う、③あまり思わない、④思わない、として、顎間固定患者の口腔ケアにブラッシングが効果的であることを知っていたか、①知っていた、②知らなかった、より回答してもらった。

図1:顎間固定の模型を用いた口腔ケア



また、これまでの顎間固定患者の口腔ケアの観察に不足があったと思うか、①思う、②少し思う、③あまり思わない、④思わない、として、不足していたと思う点を自由記載とした。今後術後の顎間固定患者の口腔ケアの確認について、どのようなことを確認しようと思うか、①ウォーターピックを使用しているか、②患者の手技、③使用前後の口腔内、④その他(自由記載)とした。

5.倫理的配慮

アンケート実施時の倫理的配慮については、アンケー

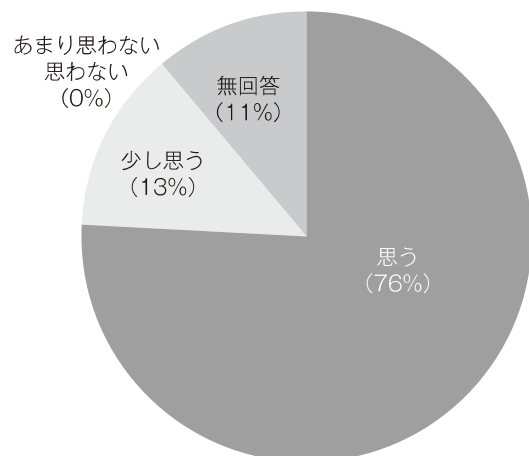
トによる回答にて個人を特定されることのないようにし、研究目的・研究内容を書面及び口頭で説明し、同意を得て行った。また、研究で得た情報は厳重に保管し、研究終了後速やかに破棄した。

Ⅱ 結 果

勉強会前のアンケート結果から、口腔外科チームにいたことがあるか、①ある96%、②ない4%であった。患者に術後の口腔ケアの指導をしたことがあるか、①ある93%、②ない7%であった。何を使いどのように説明をしたか、①ウォーターピック85%、②口頭22%、③その他0%であった。ウォーターピックの使い方について説明をする際に不安な点はあるか、①ある86%、②ない4%であり、不安に思う点については「使い方の指導に自信がない」との回答があった。説明をする際に必要と思うものでは、①オリエンテーション用紙78%、②実寸大模型11%、③口頭のみ19%であった

勉強会後のアンケート結果から、「オリエンテーション用紙があると説明がしやすい」「模型で顎間固定のイメージが付きやすいと患者からの評判が良かった」との回答があった。オリエンテーション用紙は口腔ケアの説明に役立つと思うかには、①思う76%、②少し思う13%であった(図2)。自由記載では、「動画があるとさらによい」「模型を用いることで手術後のケアについて想像しやすい」「用紙に写真もあり患者からもイメージしやすいと言われた」「今までは口頭だけの説明でイメージがしにくかったと思う」との回答があった。

図2:オリエンテーション用紙は口腔ケアの説明に役立つと思うか



顎間固定中の患者の口腔内観察を意識するようになったかでは、①意識するようになった46%、②少し意識するようになった27%、③あまり変わらない8%、④特に変わらない19%であった(図3)。特に何を意識して観察するようになったかの間には、「使用後に食残等の汚れが付着していないか」「固定器具の周囲の汚れ」との回答があった。自由記載では、「口腔ケアの手技の観察が不足していた」

「ウォーターピックを使用したか否かだけをみていた」「固定は見ていたが汚染はあまり気にしていなかった」「固定器具周囲の清潔状況はみていなかった」との回答があった。顎間固定患者の口腔ケアにブラッシングが効果的であることを知っていたか、①知っていた35%、②知らなかった65%であった。これまでの口腔ケアの観察に不足があったと思うかの問いには、①思う61%、②少し思う35%、③あまり思わない4%、④思わない0%であった(図4)。自由記載では、「ブラッシングを行っているか」「口腔内の清潔状況」「食残の有無」「歯肉の状態」との回答があった。

「患者の口腔ケアの確認はどのように行っているか」について、勉強会前と勉強会後の結果を比較した。勉強会前のアンケートでは、①ウォーターピックの使用状況の観察80%、②患者の手技の観察24%、③使用前後の口腔内の観察は40%、④その他4%であった。勉強会後のアンケート結果では、①ウォーターピックの使用状況の観察88%、②患者の手技の観察76%、③使用前後の口腔内の観察84%であり、勉強会後のアンケート結果では「患者の手技の確認」、「使用前後の口腔内の観察」に増加がみられた(図5)。

図3:顎間固定中の患者の口腔内観察を意識するようになったか

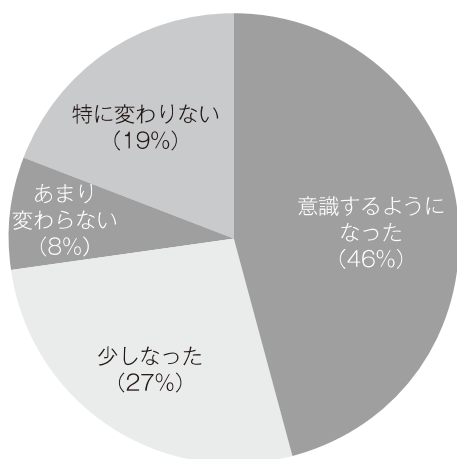


図4:これまでの口腔ケアの観察に不足があったと思うか

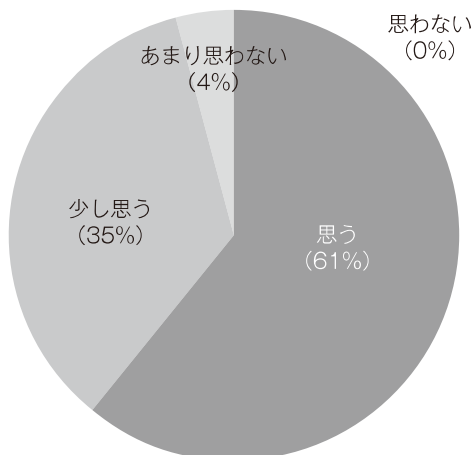
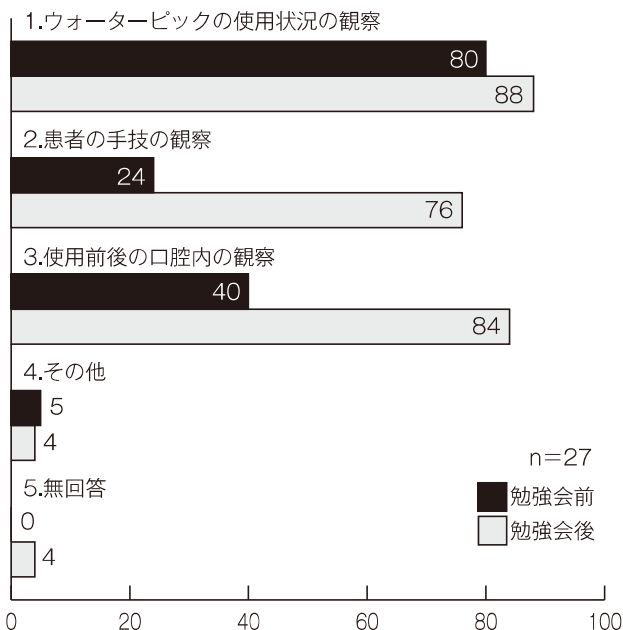


図5:手術後の口腔ケアについて実際にどのような確認を行っているか



III 考 察

図5の結果から、勉強会前には、実際に口腔内保清が保たれているかよりも、ウォーターピックを使用しているかどうかに関心が高かったと考えられ、看護師による観察の不足を自覚できていず、術後の口腔ケアを患者にまかせきりにしている現状があったことがうかがえた。今回勉強会を行い、観察の不足を呼びかけた事で、術後の口腔ケアの観察に対する意識が向上するきっかけになったものと考えられる。また、これまでは患者にブラッシングの指導を行って、勉強会前のアンケート結果から、ブラッシングが効果的であることを知らなかった人が全体の大半を占めていた。「顎間固定をしている患者の口腔ケアに関する知識が深まったと思う」「少し思う」との回答が全体の96%を占めており、勉強会を行ったことで、口腔ケアに関する知識の向上を図り、指導内容を周知することで、統一した指導を行うことができるよう、介入を行うことができたものと考えられる。

IV 結 論

今回の研究では、顎間固定患者の口腔ケアについてスタッフの指導方法、観察における意識の現状を調査し、指導方法の統一、スタッフの意識の改善を目的とした介入を行った。そのため、実際に指導を受け、自ら口腔ケアを実践している患者を対象とした調査は行っていない。今後の課題として、患者を対象とした調査を行い、そのニーズを知ること、さらに快適な術後を過ごすことができるよう、介入していくことが必要である。作成したオリエンテーション用紙についても、今後はDVDなどの動画の活用を考えるなど、効果的な指導が行えるよう、検討を行っていきたい。

本研究は平成28年4月 第13回日本口腔ケア学会総会
学術大会で発表した。

文 献

- 1) 木村真理子:顎間固定術後患者の口腔ケアに関する文献検討, 日本看護学会論文集 成人看護 I 41号, P 93-96, 2011.
- 2) 日野原重明・井村裕夫:看護のための最新医学講座第23巻, 歯科口腔系疾患, P 301, 中山書店, 2001.
- 3) 堀内みずき:これだけは避けたい看護技術 顎間固定患者の口腔ケア, Nursing Today, Vol. 21, P 26-28, 日本看護協会出版会, 2006.